

# ある女性音楽家の旅立ち

—ルイーゼ・ライヒャルトの1809年—

The Sailing Day of Louise Reichardt in 1809, as Professional Musician

荒川 恒子            宮下 幸子\*

Tsuneko Arakawa    Yukiko Miyashita\*\*

## 1. はじめに

ルイーゼ・ライヒャルト (Louise Reichardt, 1779-1826) は19世紀初頭にドイツで活躍した音楽家である。彼女は1809年以降ハンブルクに声楽教師として赴き、作曲、合唱指揮活動などをした。後年、特に英語で書かれたヘンデルの声楽作品を、母国語であるドイツ語で演奏することに力を注いでいる。

当時は女性が結婚という形以外で独立し、職業を持つということは稀であった。また彼女の生きた時代は、フランス革命、ナポレオンの侵攻と情勢が流動的であった。そのような中で彼女は自立に向けて、どのようなスタートを切ったのだろうか。本論では、父ライヒャルトとの関係、アルニムら詩人たちとの交友関係を軸に、生い立ちから1809年の旅立ちまでを概観することでこの問題を考察したい。

## 2. 生い立ち—ライヒャルトの娘として—

ルイーゼは1779年4月11日、ベルリンでライヒャルト家の長女として生まれた。父ヨハン・フリードリヒ・ライヒャルト (Johann Friedrich Reichardt, 1752-1814) はケーニヒスブルクに生まれ、リュート奏者の父から音楽の手ほどきを受けた。リュート、ヴァイオリン、鍵盤楽器に堪能で、歌手でもあった。1775年にプロイセンのフリードリヒ大王の宮廷に楽長として奉職。ルイーゼの母ユリアーネ・ベンダ (Juliane Benda, 1752-1783) と1776年に結婚した。母ユリアーネは音楽家フランツ・ベンダの娘としてポツダムで生まれた。ピアノや声楽の演奏をし、作曲の心得もある才能豊かな人で、結婚後も演奏活動や作曲を続けていた。ルイーゼは生まれつき華奢で、病気がちな子供であった。また幼少時に疱瘡を患ったことで、愛らしい顔にあばたが残ってしまった [F-Dieskau 1992:107]。彼女は長男ヴィルヘルムに続く二番目の子供であった。父ライヒャルトの活動拠点はベルリンであったが、しばしば家族を伴って旅に出た。よく訪れた都市のひとつにハンブルクがある [Salmen 2002:50]。その繋がりからか、1782年にハンブルクで母ユリアーネの作曲した鍵盤楽器と歌曲を含む曲集が出版されている [F-Dieskau 1992:117]。

1782年から83年にかけて、父ライヒャルトはフリードリヒ大王から休暇を許された。その間に家族と共に、生まれ故郷ケーニヒスブルクに滞在している。1783年4月に一家はベルリンへ戻った。そこで悲劇が訪れた。ルイーゼの兄ヴィルヘルムが死亡したのである。4月24日には母ユリアーネがルイーゼの妹ユリアーネ (愛称ユーリ) を生んだ。しかし再び悲劇が襲い、ルイーゼと生まれたばかりのユーリを残し、5月9日母ユリアーネは急逝してしまう [Salmen 2002:53]。父ライヒャルトは服喪期間も旅を続け、ヴィーン、ヴァイマルなどを訪れた後、ハンブルクに滞在した。そこでヨハンナ (Johanna Wilhelmina Dorothea Alberti, 1754年ハンブルク生) と出会い、1783年12月14日に再婚した。

---

\* 山梨大学教育人間科学部科目等履修生

\*\* Research Student, Faculty of Education and Human Sciences, University of Yamanashi

彼女の妹マリア・アマリアは1798年にライヒャルト家と関係の深いルートヴィヒ・ティーク (Ludwig Tieck, 1773-1853) と結婚している [Salmen 2002:56]。ヨハンナも再婚であり、最初の結婚で3人の子供がいた。またライヒャルトとの間にも5人の子供が生まれた。このことからルイーゼは10人の兄弟姉妹に囲まれて生活するようになる [Brandt 1858:9]。再婚直後にはハンプルクからライヒャルト家が生活していたベルリンまで、ヨハンナの姉妹が子守りに訪れている。義理の兄弟姉妹が増えた後も、家族関係は決して悪くなかったようである [F-Dieskau 1992:128]。ルイーゼは長女としての役割をよく果たし、成長とともに家族の世話を積極的にするようになった [Brandt 1858:10]。

ルイーゼは正規の教育は受けていなかったが、教養に満ち、音楽的な才能に恵まれていた。父ライヒャルトはこの時期、ゲーテ、ヘルダー、モーゼス・メンデルスゾーンらと親交があった。ベルリンの家には芸術家や知識人が集い、周囲には常に音楽が溢れていた。その成育環境がルイーゼの生まれ持った才能を開花させたものと思われる。彼女は、ギター、リュート、ピアノの演奏に熟達し、ソプラノのよい声を持っていた。父ライヒャルトは彼女の声に注目し、ベルリンで声楽のレッスンを受けさせた。しかし彼女はレッスン中にひきつけを起こし、喉を故障してしまった。この故障が原因で、彼女は歌手として父親と仕事をする事はなかった [Brandt 1858:11]。代わりに父親の開く知識人の集まりを手伝うようになる。集まりは居住地ベルリンに限らず各地で行われ、彼女も父親に同伴して旅をした。そこには詩人も顔を出し、彼女はその作品に作曲する喜びを見出すようになった。14歳の頃には、ルイーゼの音楽の才能は周囲に認められるものとなっていた [Brandt 1858:12-13]。

少し後のことになるが、ライヒャルトのヴァイマル滞在中に、ティークとルイーゼがやってきて、音楽の集まりに参加した様子がアマリエ・ヘルヴィックの日記に残っている。「その朝、ライヒャルトは公爵の母君と呼ばれた。そして夜の集まりにも出席したいのですが、と私に言った。私は自分の音楽的知識のためにお招きすることにした。ライヒャルトの娘は、容貌は非常に美しいとは言えないが、単純な振る舞いと自然な優しさで、調和のとれた本質を持つ人であった。たくさんの歌をうたい、演奏をし、その会は10時過ぎまで続いた。終わる頃には私には彼女が愛すべきお客様のように思えた」 [1802年10月22日/Salmen 2002:100]。このような交流の場で、自身が作曲した歌曲を披露する機会を得、ルイーゼの中には作曲に対して特別な思いが育ちつつあった [Brandt 1858:13]。

### 3. ゴービヒェンシュタインへー最初の歌曲集一

1786年にフリードリヒ大王が死去し、父ライヒャルトは新しい王フリードリヒ・ヴィルヘルム2世の宮廷楽長となった。1790年10月からは俸給付きで3年間の休暇を許されている。1792年には恐怖政治下のパリに滞在し、自由主義者として知られた。ベルリンに戻った彼は、「J.フライ」という筆名で革命に共感する著書『フランスに関する私信 *Vertraute Briefe über Frankreich*』 (Berlin, [1792]) を出版する。この著作が原因で彼は共和主義者と見なされ、1794年に宮廷楽長の地位を追われた。一家はベルリンを去り、ハレ近郊のゴービヒェンシュタインに居を移した。失脚による移転ではあったが、この家は当時でも指折りのサロンのひとつに成長していく。特に1796年に父ライヒャルトがフリードリヒ・ヴィルヘルム2世から恩赦され、ハレの製塩所長に任命されてからは経済的に安定した中で芸術を追求できる場となった。ルイーゼにとっても一層の成長を遂げる場となる。

やさしげな丘に囲まれ、ザーレ川を臨み、古城が点在するという環境にあったこの家は、詩人や作家を喜ばせ、頻りに訪問客があった。ゲーテ、ティーク、ノヴァーリス、シュレーゲル一家、アイヒェンドルフ、ブレンターノ、アルニム…といった人物がここを訪れた。ゲーテは、この家を「ロマン主義の隠れ家」と呼んだ。この場所は、ロマン派の詩歌、民謡や民俗芸術、歌曲、ジングシュピール、ドイツ語オペラの中心地となった [Reich 1981:VIII]。詩人アイヒェンドルフは1857年に執筆したハレに関する文章で、『谷の上に城があり *Da steht eine Burg überm Thale*』という詩と共に、この家について

次のような回想を記している。「才能溢れる美しい娘たちが現れるギービヒェンシュタインのライヒャルト家の庭は多分に神秘的であった。ある娘はゲーテの詩に作曲をし、ある娘はシュテッフェンスの婚約者であった。そこでは植え込みに隠れた向こう側から歌やギターの旋律が流れ、夏の夜の熱の中に木魂する。それはあたかも近づいてはならない魔法の島から漂ってくるようだ。そして多くの若い詩人たちは、虚しく、格子戸を通して垣間見、または夜近くまで花をつけた木々の間の扉に腰をかけ、まだ見たことのない小説のような夢を見る」[遺稿集 [1866] に収録。/Salmen 2002:77]。

ギービヒェンシュタインに立ち寄った若い詩人の作品に作曲することを契機として、ルイーゼは強い作曲意欲を持つようになった。歌曲の作曲に彼女が関心を示したのはゲーテの詩によく作曲した父親の影響もあると思われる。例えば1797年にシュレーゲルの仲介でライヒャルト家をフリードリヒ・アウグスト・エッセンという若い詩人が訪れている。彼は家庭音楽会にも参加した。そこでルイーゼは彼の詩に作曲をし、歌った。父ライヒャルトも彼のソネットに作曲した [Salmen 2002:91-92]。

少しずつ作曲されたルイーゼの歌曲が最初出版物となったのは1800年のことである。《ドイツ語による12の歌曲—ヨハン・フリードリヒ・ライヒャルトとその娘ルイーゼ・ライヒャルトによる XII Deutsche Lieder von Johann Friedrich Reichardt und dessen Tochter Luise Reichardt》(Zerbst: C.C.Menzel, [1800]) がその作品集である。父親との共同出版で、ルイーゼの歌曲は4曲収録された。以後、彼女の作品は父親以外の人物にも認められ出版されるようになる。1802年にはコッタ社からでたヴィーラント、ゲーテ、父ライヒャルトの編集による歌曲集に〈何がそんなに私の心を惹きつけるの Was zieht mir das Herz so〉という曲が収録された [F-Dieskau 1992:309]。1804年にはヴィルヘルム・エーレルスという歌手が、ツェルター、ヴィンター、ハーク、マルティン、ツムシュティークの作品とともにルイーゼの作品を収録し、出版した [Salmen 2002:99]。

このような積み重ねが結実し、1806年ルイーゼ最初の単独歌曲集が出版される。《ピアノ伴奏付き12のドイツ語とイタリア語によるロマン風の歌曲を作曲。母なるザクセン=ヴァイマール=アイゼナハ公妃アンナ・アマリア様に純粋なる崇拜をこめて、ルイーゼ・ライヒャルト XII Deutsche und italiänische romantische Gesänge mit Begleitung des Piano-Forte, Componiert, und Ihrer Durchlaucht der Herzogin Mutter, Anna Amalia von Sachsen Weimar und Eisenach aus reiner Verehrung zugeeignet von Louise Reichardt》(Berlin:Verlage der Realschul-Buchhandlung, [1806]) と題された歌曲集である。この歌曲集は『ベルリン音楽新聞 Berlinische musikalische Zeitung (BmZ)』で公示された。父ライヒャルトはそこで「これらは非常に純粋で、優しさに満ちた感情の湧き出た歌曲である。…喜びと表情豊かな彼女の手によるこれらの歌曲は、その作品の内に価値があるものである…」と記した [BmZ,2 (1806) 156/F-Dieskau 1992:327-328]。また『一般音楽新聞 Allgemeine musikalische Zeitung (AmZ)』では次のように評された。「父親の作品に類似しているが、決して情緒がないわけでない…(父ライヒャルトの作品と比較して)、彼女は軽いスタイルで書くときに、より軽やかに曲を書き、気持ちよく優しいスタイルに努めようとするときには、はるかに気持ちよく、優しい作品を書く。…彼女の作品は情緒に欠けていない」[AmZ,8 (1806.7.23) 687/Reich 1981:VIII]。この記事では彼女の父親が和声の間違いを指摘していないことをたしなめ、他の弱点についても言及している。しかしルイーゼの作風に父親とは異なった魅力があることも伝えるコメントだと感じる。

この歌曲集で彼女は、アルニム、ティークらの詩をとりあげた。またメタスタージョのイタリア語の詩に曲をつけている。彼女の義妹ヨハンナと結婚したヘンリッヒ・シュテッフェンスは、『我が体験の記 Was ich erlebte』(Breslau, [1842]) の中でルイーゼと歌曲について次のように記述している。「ライヒャルトの娘たちはみな音楽の才能を多かれ少なかれ持ち、よい声をしていた。中でもルイーゼの才能は卓越しており、歌と並んで作曲も真剣に学んでいた。彼女の歌曲作品は独特なもので、父親の作品を後追いするものではなかった。父親がゲーテの作品に作曲したのに対し、彼女は若い詩人の作

品に非常に優れた歌曲を作曲した。それは自然なことであった。彼女が作曲したティーク、アルニム、ブレンターノといった詩人は一家と繋がり深い人たちである。彼女の楽曲の多くは、一般的な出だしよりも低い音から始まるのが特徴的であるように思う。彼女の作品はライヒャルトの作品より人気があり、民謡風で、人はそれに好意的であった。ルイーゼの優しい面のよくてた曲であった。往来では召使や田舎の娘たちが口ずさむのを聞くことができた。…」[F-Dieskau 1992:348-349]。

この記述からは、ルイーゼの歌曲作品が独特の世界観を持っていたことが伝わる。また当時の人にとって口ずさみやすく、人気のある歌曲であったことがわかる。

#### 4. 詩人たちとの協力関係—アルニム、ブレンターノと—

初期の歌曲集でルイーゼは、ライヒャルト家と関係の深い詩人の作品を取り上げた。そしてその詩人たちと協力関係を結び、友情を深めることになった。特に『少年の魔法のつのぶえ Des Knaben Wunderhorn』で知られるアヒム・フォン・アルニム (Ludwig Joachim (Achim) von Arnim, 1781-1831)、クレメンス・ブレンターノ (Clemens Brentano, 1778-1842) とは強い絆があった。ライヒャルト親子とアルニム、ブレンターノの間では、彼らがギービヒェンシュタインを訪れた際に、あるいは往復書簡で詩が送られ、作曲して戻された。ルイーゼは彼らの詩の校訂も手伝っている [Reich 1981:VIII-XV]。なおアルニムとライヒャルト家の交流は、彼がハレ大学に入学した1798年に始まる。またブレンターノは1804年に初めてギービヒェンシュタインを客として訪れている。

『少年の魔法のつのぶえ』の第1巻が出版されたのは1806年であるが、その出版に際し、父ライヒャルト及びルイーゼが果たした役割は少なくない。出版物として『少年の魔法のつのぶえ』が世に出る前に、この古いドイツ語による民謡の収集の試みを最初に公示したのが父ライヒャルトの『ベルリン音楽新聞』1805年3月の記事であった。ここで彼はアルニムとブレンターノの試みを紹介すると同時に『朝のあいさつ Morgengruß』という詩に作曲を施し、誌上で発表した [BmZ,7 (1805)]。また彼らの詩に作曲し『トロバドゥール Le troubadour italien, français et allmand』(Berlin, [1805-1806]) という作品集を出版している [Steig 1894:114-115]。ルイーゼも『少年の魔法のつのぶえ』から詩を選び作曲した。1805年秋頃には既に8曲ほどの作品が生まれている [Moering 1990:210]。

アルニムは『少年の魔法のつのぶえ』初版の巻末に『民謡について Von Volksliedern』という文章を収録し「宮廷楽長であるライヒャルトに寄す」としている [Koch 2001:859-886]。また、「あとがきとして、読者の皆様へ」と書き出し、次のような謝辞を述べている。「宮廷楽長であるライヒャルトは彼の発行している尊敬する音楽新聞中で、上記の作品の一部を公表してくれた。彼はこの機会にすべての内容が印刷できるよう、全力を尽くしてくれた。なんといっても価値ある仕事であると言ってくれたのが嬉しかった。その記事によってなんと好ましく、品位のある作品に見えたか。同時に私は、収集という方法を通して民謡を研究するために、『つのぶえ』において協力関係を持てたことを喜ばしく思う…1805年7月ハイデルベルクにて」 [Koch 2001:887]。1818年の新版のあとがきではルイーゼの名前もあげ、謝意を表している。「…心からの感謝を新しい新鮮な歌曲に。心からの感謝を新しいメロディーに。それらの曲は『つのぶえ』に相応しい方向を与えてくれた。ここで私たちは真っ先にこの作品を公にしてくれたライヒャルトの名前を再びあげたい。その名前は、(父ライヒャルトだけでなく)彼の娘のルイーゼの名前とも結びついている。…1818年9月20日ベルリンにて」 [Koch 2001:890]。

アルニムとルイーゼの協力関係は1805年から強くなっている。この年の12月、彼はギービヒェンシュタインに立ち寄った。その際1804年に彼が刊行した小説『アリエルの啓示 Ariel's Offenbarungen』の中からルイーゼが詩を選び、作曲したものを受け取っている。彼はその時の様子をブレンターノに書き送っている。「…クリスマスらしい晴れやかな場所ですてきな10日間を僕は過ごし

たよ。一番年上の娘ルイーゼが中をくりぬいたクルミに入れて『アリエル』の中からの歌に優美で上品な音楽をつけたもの（の楽譜を）赤いリボンで結んで僕に贈ってくれた。彼女はまた他に三曲素晴らしい作曲をしている。本当は実の入っているはずのクルミは、天空の中の地球儀のようで、中に咲いた花が詰まっているようだった。…」[1806年1月26日/Moering 1990:209]。この時彼に渡された曲は《百合は私を見つめています Lilje sieh mich》という曲だと思われる。この曲は同じく『アリエルの啓示』からルイーゼが作曲した《イーダ Ida》《ハイムダル Heymdal（北歐神）》と共に、1806年の歌曲集に収録された [Moering 1990:223]。

アルニムはギービヒェンシュタインのライヒャルト親子に、頻繁に詩を書き送っていた。例えば父ライヒャルトは1806年4月22日の書簡でアルニムに感謝を述べている。「更に詩を数編送ってくれてありがとう。私とルイーゼからお礼を言わせてもらうよ。ルイーゼは『放浪者』に美しい曲を再度作曲した。各々の詩節と言葉が完全にメロディーの中で一体化している。まもなくこれを聞かせることができると思うよ」と。ルイーゼは送られた詩に〈悲しみの放浪者 Der traurige Wanderer〉とタイトルをつけ曲を完成させた。（アルニムがつけた詩のタイトルは『放浪にて Auf der Wanderung』となっている）。この曲は1819年の作品集に収録されている [Moering 1990:210]。

書簡を介した詩人との協力関係はブレンターノの間にも見られる。1806年に彼は旅先で耳にした『父親の嘆き Vaters Klage』という歌の詩をアルニムに書き送った。そしてこの詩にライヒャルトかルイーゼが曲をつけてくれないかと要望している [Steig 1894:178-179/なおこの詩はエルヴェルト (Anselm Karl Elwert) 作である]。ルイーゼがこの詩に作曲したものは、1806年7月1日のアルニムの手紙と共に彼に届けられた。「親愛なるクレメンス、僕は君の送ってくれた最後の2通の手紙をここで受け取り、本当に集中して読んでいるよ。君の『放浪』はしばしば僕を君に惹きつけてやまない。同封したものをみれば、君は『父親の嘆き』(の付曲) が実現したことを知るだろう。君はこの歌の詩がエルヴェルトのものであると正直に書いていたね。そうでなければ僕はいくつかの詩行の中に、君の手法を発見できたように思うだろうよ。あと2曲の歌を君の作品から。君は受け取らないなんて言わないで欲しい。ここにある曲について説明するよ。1曲は、〈小さな花束 Sträublein〉。この曲にはリュートの伴奏が必要だ。もう1曲は〈セビーリャへ Nach Sevilla〉。君はこの曲を楽しみ、歌うことだろう。僕は君の曲を羨ましく思うよ。…」[Steig 1894:183-184]。

3曲の歌曲作品〈父親の嘆き〉〈小さな花束〉〈セビーリャへ〉は、ルイーゼが後に妹のフリーデリケに献呈した《ピアノ伴奏付き12の歌曲 Zwölf Gesänge mit Begleitung des Forte-Piano. Componiert und Ihrer geliebten Schwester Friederike zugeeignet von Louise Reichardt》(Hamburg:Johann August Böhme, [1810])に収録されている。1806年には『少年の魔法のつづえ』から〈鶉の番人 Wachtelwacht〉[Koch 2001:109-110]にも作曲された。この曲はハンブルクのジレム夫人に捧げられた《ピアノ伴奏付き12の歌曲集第3巻 XII Gesänge mit Begleitung des Forte-pianos. Componiert und ihrer jungen Freundin und Schülerin Demlle Louise Sillem zugeeignet von Louise Reichardt》(Drittes Werkchen. Hamburg:Böhme, [1819])に収められた [Steig 1894:185/出版年を1811年または1812年とする説もある]。

詩人たちの詩作と同時期を生きたルイーゼが、彼らと協力関係を持ち、その時代の感覚で多数の曲を残していることは興味深い。

## 5. ナポレオンの侵攻と旅立ちに向けて

恵まれた環境の中で作曲を続けていたルイーゼだが、ナポレオン軍が侵攻してきたことにより境遇が変化した。1806年夏、アルニムがギービヒェンシュタインに滞在した直後、ナポレオン軍が中部ドイツに侵攻した。それに伴いライヒャルト家は父親の生まれ故郷ケーニヒスブルクに避難した。10月にはハレもその近郊のギービヒェンシュタインも占領された。アルニムとブレンターノはライヒャ

ルト家を気遣い、1807年夏にケーニヒスブルクまで足を運んでいる [F-Dieskau 1992:348]。1807年10月初めにライヒャルト家がギービヒェンシュタインに帰宅すると、すべてが破壊され家財道具は持ち去られていた。また物理的な破壊のみならず、ティルジットの和約により、ハレはプロイセンから切り離されてしまった。父ライヒャルトは仕事を失い、ルイーゼは故郷を失ったことになる。彼女はアルニム宛ての手紙の中で「愛する故郷」を失った衝撃について書き記している。「…私は絶え間ない不確実な状況下で重苦しい日々を過ごしています。そのせいであなたの慰めのお便りにも充分にお礼が言えずにいます。残念ながら酷い条約が結ばれ、一昨日、公になった状況からしても喜びはそう簡単には戻りそうもありません。この条約は私たちが永遠に愛する故郷から遠ざけました。私はその喪失を言葉で表現することができません。あなたは私たちの幸せな日々を知っています。私たちがあの美しい日々を再び見出すためには多くの状況に出くわさなくてはならないことも…」[1807年7月28日ギービヒェンシュタイン/Moering 1990:210/253 (Nr.21)]。

友人たちはライヒャルト家に手を差し伸べ続けた。11月には父ライヒャルトがヴァイマールへ知己を訪ねる旅に出るのに、アルニムとブレンターノが同行した [Salmen 2002:109]。残された家族はギービヒェンシュタインで困窮を極めていた。アルニムはルイーゼの作品を出版することで、一家の窮乏を乗り切れないかと画策した。それはギター伴奏による歌曲集の出版計画で、申し出を受けたルイーゼは彼に手稿譜を送付している。彼はベルリンでの出版を考えたが、1808年春には奔走虚しく計画は頓挫している [Moering 1990:211-212]。

1807年末になり、父ライヒャルトはカッセルのジェローム・ボナバルトに劇場付属オーケストラの総監督として招聘された。この折、ルイーゼも父と共にカッセルに滞在した。ルイーゼはそこでグリム兄弟と親しくなり、ヴィルヘルム・グリムの翻訳の手伝いなどをしている [F-Dieskau 1992:379]。父ライヒャルトは新しい歌手を探す旅に出たがジェロームの不興を買い、カッセルには戻らなかった。彼はヴィーンで何ヶ月かを過ごした。父の失脚後ルイーゼはハレに戻った。ライヒャルト家はルイーゼの義妹ヨハンナが嫁いだシュテッフェンス家とハレで共同生活を送ることになった。一家は更にひどい困窮に襲われ、この頃からルイーゼは真剣に収入を得ることを考え始めている。以前から家計は彼女が預かっていた [Brandt 1858:12]。ライヒャルト家の借金は年々かさんでおり、今後この家をどう維持するかという問題は彼女を酷く悩ませた [Reich 1981:IX]。

ルイーゼはまずギービヒェンシュタイン近郊で音楽教授をし、収入を得ようとした。しかし次第に大都市に出ることを考えるようになる。1809年3月には友人たちもこの状況を受け、ルイーゼの行き先を探している。アルニムはフランクフルト行きに関して、1811年に彼と結婚することになるブレンターノの妹ベッティーナと書簡を交わしている [B-Stetter 1996:61]。ルイーゼはこの助力に関して4月18日の手紙でアルニムにお礼を言っている [Moering 1990:256-257 (Nr.26)]。義母ヨハンナの故郷で、父ライヒャルトと関係の深いハンプルクもルイーゼの行き先の候補にあがっていた。1809年の復活祭から秋まで心臓の治療のためハレに滞在したヴィルヘルム・グリムは、一家の苦境を兄ヤーコプに書き送っている。「兄さんは音楽を教えることでルイーゼが生活費を稼ごうとしていることを知っているね。ギービヒェンシュタインが自由になればなんとかなるかもしれないが、その場所を見た限りでは上手いかわないように思える。彼女はフランクフルト行きに関して、生計を立てられるか考えた上で問い合わせを続けている。フランクフルトがだめならハンプルクが残っている。彼女は否応なく、そこへ行くことになるだろう」[1809年5月21日ハレ/Steig 1923:30 (Nr.7)]。

6月にライヒャルト家は家賃の高いハレの街中からギービヒェンシュタインへ移った [Steig 1923:30-31 (Nr.10)]。ギービヒェンシュタインといっても昔の家ではなく、他の家から数部屋間借りしての転居であった。「なんとか幸せに日々を送っています」とルイーゼはアルニムに6月21日付けで書き送っている [Moering 1990:258-259 (Nr.28)]。夏になり、ブレンターノがギービヒェン

シュタインを訪れた。彼はルイーゼにベルリン行きを提案した。14歳まで過ごしたベルリンは彼女にとって他ならぬ故郷である。心は踊ったが、この案も情勢不安により頓挫してしまった [Moering 1990:213]。

父ライヒャルトは7月にギービヒェンシュタインに戻ってきた。旅から帰った父にルイーゼは自分の決意を告白した。声楽教師として大都市に赴き現状を打開したいこと、また素行の悪い末弟フリードリヒに正規の教育を受けさせたいこと…。父ライヒャルトは承諾をし、ルイーゼは弟と共にハンブルクへ旅立つこととなった。ジレム夫人という銀行家の未亡人宅が受け入れ先である。出立に際し、父は娘にエチケットや音楽教授の心構えを事細かに話して聞かせている [Brandt 1858:19-20]。娘を見送る決心をした父親の心の中はかなり寂しかったようで、1809年9月30日のヤーコプ・グリム宛の手紙で心情を告白している [Steig 1923:31 (Nr.15)]。10月8日、ルイーゼは出発を目前にギービヒェンシュタインからの最後の手紙をアルニムに向けて書いた。「私はこの場所からいなくなります…。これまでの日々と訣別するように、別れの言葉が短く綴られている [Moering 1990:261 (Nr.31)]。

ルイーゼは旅立ち、まもなく無事の知らせが届いた。父ライヒャルトはヤーコプ・グリムへの11月9日の手紙で彼女がジレム夫人宅で大切にされていることを記している [Steig 1923:32 (Nr.17)]。12月に入りライヒャルト家には彼女からクリスマスプレゼントが届いた。妹のフリーデリケは12月30日、ヴィルヘルム・グリムに宛ててそのことを伝えている [Steig 1923:35-36 (Nr.21)]。同日、ハンブルクではルイーゼがヴィルヘルムに近況を知らせる手紙を書いていた [Steig 1923:36-37 (Nr.22)]。そこにはジレム夫人宅での新しい生活が終始明るい調子で記されている。

1809年のジルヴェスターをルイーゼは希望を持って迎えたに違いない。

## 6. おわりに～ルイーゼ・ライヒャルトの1809年～

ルイーゼの独立は、ナポレオンの侵攻という刺激によってなされた。独立といってもこの時点では、まだ父親の力の及ぶ範囲内での独立であり、完全な自立とは異なるように思える。しかしこのハンブルク行きが彼女の活躍の第一歩となったことは確かである。ライヒャルトの娘ルイーゼから、一人の音楽家ルイーゼ・ライヒャルトとなるまでにはもう少し時間を経ることになる。この1809年の出発以降、彼女の活動の場はハンブルクとなり、1826年にこの世を去るまで、ここが彼女の本拠地となった。

この旅立ちは、音楽家として生き始めるスタートであった訳だが、それ以前に、彼女はこの当時のあたりまえの人生、すなわち「結婚する」ということをまったく考えなかったのだろうか。彼女はギービヒェンシュタイン時代に二度婚約し、二度とも婚約者が亡くなってしまうという経験をしている。このことが彼女の意志の分岐点になった気がする。あるいはナポレオンの侵攻がなければ、まだ結婚の可能性もあったかもしれない。決して最初から、自主独立を強く意識する女性ではなかっただろう。時代の流れの中で、気付けばこの道を選ばざるを得なくなったようにみえる。

また青春期にロマン派を代表する詩人、文学者たちとの協力関係を結んだことは、後の彼女の活動に大きく影響を及ぼしたように思える。アルニム、ブレンターノ、グリム兄弟。いずれも、ドイツ語という母国語による固有の文化を見直し、作品を生み出した人物たちである。それはナポレオンによる脅威に対する反動という側面を持つ。ルイーゼ自身、1810年に再びハンブルクでナポレオンの惨禍にあった。度重なるナポレオンによる刺激が、彼女の意識の目覚めを促したのではないか。ヘンデル声楽作品の母国語による演奏に積極的に関わるようになったきっかけもここにあると感じる。古い時代の美しい音楽への憧れと同時に、民族としての自覚という面を強く感じるのだ。他ならぬ父ライヒャルトも、過去の作曲家への視点を常に持ち続けた人であった。

ルイーゼ・ライヒャルトにとっての1809年は、小さな旅立ちの年であった。しかし彼女の功績を

現在にまで伝える、大きな旅立ちへの序章でもあった。

付記：本論は荒川恒子が指導し、宮下幸子が主に研究、執筆を行った。なお、山梨大学大学院教育学研究科修士論文『ルイーゼ・ライヒャルト考察-ハンブルク大音楽祭(1818年)をめぐる-』宮下幸子(平成17年2月2日提出 指導教官:荒川恒子)を基礎とし、更に研究を進めたものである。

#### 引用及び参考文献

1. Brandt, Martin G. W. *Leben der Luise Reichardt: nach Quellen dargestellt*. Karlsruhe:Holzmann & Eckartsberga, 1858. [Brandt 1858]
2. Fischer-Dieskau, Dietrich. *»Weil nicht alle Blüenträume reifen« :Johann Friedrich Reichardt, Hofkapellmeister dreier Preußenkönige; Porträt und Selbstporträt*. Stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt, 1992. [F-Dieskau 1992]
3. Moering, Renate. *Arnims künstlerische Zusammenarbeit mit Johann Friedrich Reichardt und Louise Reichardt. Mit unbekanntem Vertonungen und Briefen*. [Neue Tendenzen der Arnimforschung : Edition, Biographie, Interpretation, mit unbekanntem Dokumenten. hrsg. Roswitha Burwick, Bernd Fischer. (*Germanic Studies in America*, no.60. S.198-288)] Bern:Peter Lang, 1990. [Moering 1990]
4. Reichardt, Louise. *Songs*. Compiled and an introduction by Nancy B. Reich. (*Da Capo Press woman composers series*, no.7.) New York:Da Capo Press, 1981. [Reich 1981]
5. Salmen, Walter. *Johann Friedrich Reichardt: Komponist, Schriftsteller, Kapellmeister und Verwaltungsbeamter der Goethezeit*. (Nachdruck der Ausgabe Freiburg. i. Br. und Zürich: Atlantis-Verlag, 1963.) Hildesheim:Georg Olms Verlag, 2002. [Salmen 2002]
6. Steig, Reinhold. *Achim von Arnim und Clemens Brentano*. [Achim von Arnim und die ihm nahe standen. Bd.1; hrsg. Reinhold Steig, Herman Grimm.] Stuttgart:J.G.Cotta, 1894. [Steig 1894]
7. Steig, Reinhold. *Die Familie Reichardt und die Brüder Grimm*. (*Euphorion* Nr.15, S.15-54) Wien:C. Fromme, 1923. [Steig 1923]
8. Boffo-Stetter, Iris. *Luise Reichardt als Musikpädagogin und Komponistin:Untersuchungen zu den Bedingungen beruflicher Musikausübung durch Frauen im frühen 19.Jahrhundert*. (*Beiträge zur Geschichte der Musikpädagogik*, Bd.4. hrsg. Eckhard Nolte, Reinhold Weyer.) Frankfurt am Main: Peter Lang, 1996. [B-Stetter 1996]
9. Boffo-Stetter, Iris. *Luise Reichardt (1779-1826)*. (*an sieben Komponistinnen; mit Berichten, Interviews und Selbstdarstellungen*. hrsg. Clara Mayer:Furore Edition 898.) Kassel: Furore Verlag, 2000.
10. Arnim, Ludwig Achim. Brentano, Clemens. *Des Knaben Wunderhorn:Alte deutsche Lieder*. gesammelt von L.Achim von Arnim und Clemens Brentano; hrsg. Willi August Koch; mit einem Nachwort von Heinz Rölleke. Düsseldorf:Artemis & Winkler, 2001. [Koch 2001]
11. Sadie, Stanley, ed. *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*. 20 vols. London: Macmillan Publishers, 1980. [邦訳：ニューグロヴ世界音楽大事典. 本巻21巻, 別巻2巻 東京：講談社.]
12. 伊東辰彦 天才音楽家たちの友情記念帳. [講談社選書メチエ246] 東京：講談社. 2002.
13. 吉原高志 [訳] 少年の魔法の角笛. 童唄之巻. (アヒム・フォン・アルニム, クレメンス・ブレンターノ [編].) 東京：白水社. 2003.
14. 矢川澄子, 池田香代子 [訳] 少年の魔法のつづえ-ドイツのわらべうた-. (ブレンターノ, アルニム編. 岩波少年文庫049) 東京：岩波書房. 2000.
15. 山田好司 [訳] グリム兄弟往復書簡集-ヤーコプとヴィルヘルムの青年時代. 第1巻2002：第2巻2003：第3巻2004. 東京：本の風景社. (*Selbstbiographie*. Jacob Grimm, 1931/Wilhelm Grimm, 1930. / *Briefwechsel zwischen Jacob und Wilhelm Grimm aus der Jugendzeit*. 1880.)